若小朗誦
～松陰先生が大切にしていたことばから学ぶ～

１　ねらい
(1)　「松陰先生のことば」から学び、より高い自己実現への意欲を高める。
(2)　朗誦により、心の安定を図り、落ち着いた気持ちで学習に取り組む。
(3)　「松陰先生のことば」を教科「日本語」の発展として取り扱ったり、道徳の内容項目と関連させたりしながら、日常の生活と関係付けて考えられるようにする。

２　実施日時
毎週金曜日、土曜授業日
朝活動・・・所要時間３分間

３　実施方法
①　起立
②　椅子を机の中に入れる。
③　教育目標に向かって気を付け（視線を一点に集中させる）
　・背筋を伸ばす
　・かかとをそろえる
　・つま先を広げる
　・指先をのばす
④　「おはようございます」・・・先生との朝のあいさつ
⑤　教育目標朗誦
　「至誠にして動かざる者は　未だ之れ有らざるなり」（３回繰り返す）
⑥　当該学期のことばの朗誦
　「凡そ読書の功は　昼夜を捨てず　寸陰を惜しみて
　　是れを励むにあらざれば　其の功を見ることはなし」（３回繰り返す）

※　意味などは、教科「日本語」の時間を使って指導する。
※　道徳や普段の生活と関連させてとらえる。

４　朗誦することば
学期に１文ずつ学び、年間で３文、６年間で１８文を学ぶ。

【１学期】

学年	松陰先生のことば	意味
1年	今日(きょう)よりぞ　幼心(おさなごころ)をうち捨(す)てて 人(ひと)と成(な)りにし　道(みち)を踏(ふ)めかし	今まで、親にすがり甘えていたが、小学生となった今日からは、自分のことは自分でし、友達と仲よくしよう。
2年	学(がく)は　人(ひと)たる所以(ゆえん)を　学(まな)ぶなり 志(こころざし)を立(た)てて　以(も)って万事(ばんじ)の源(みなもと)となす	学ぶ、勉強するということは、人間が人間たるゆえんを知るためにすることだ。何事をするにも志がなければ、なんにもならない。まず始めに志を立てることから始めよう。
3年	凡(およ)そ生(う)まれて人(ひと)たらば　宜(よろ)しく人(ひと)の 禽獣(きんじゅう)に異(こと)なる所以(ゆえん)を知(し)るべし	人間として生まれてきた以上は、動物とは違うところがなければならない。どこが違うかというと、人間は道徳を知り、行うことができるからである。道徳が行わなければ、人間とは言わない。思いやりをもって行動しよう。
4年	凡(およ)そ読書(どくしょ)の功(こう)は昼夜(ちゅうや)を舎(す)てず　寸陰(すんいん)を惜(お)しみて 是(こ)れを励(はげ)むにあらざれば　其(そ)の功(こう)を見(み)ることなし	読書の効果をあげようと思えば、昼と夜の区別なく、わずかな時間でも惜しんで、一心に読書に励まなければ、その功をみることはできない。たくさん本を読もう。
5年	誠(まこと)は天(てん)の道(みち)なり　誠(まこと)を思(おも)うは人(ひと)の道(みち)なり 至誠(しせい)にして動(うご)かざる者(もの)は　未(いま)だ之(こ)れあらざるなり 誠(まこと)ならずして未(いま)だ能(よ)く動(うご)かす者(もの)は　あらざるなり	誠というものは人のつくったものではなく、天の自然に存するところの道である。この誠というものに心づいて、これに達しよう、これを得ようと思うのは即ち人の人たる道である。学んでこれを知り、努めてこれを行うは人たるものの道である。このように、誠の至極せる心に会っては、何物も感動されないものではない。誠というものはすべての元になるものである。誠をもって行動しよう。
6年	体(たい)は私(わたくし)なり　心(こころ)は公(おおやけ)なり 私(わたくし)を役(えき)にして　公(おおやけ)に殉(したが)う者(もの)を大人(たいじん)と為(な)し 公(おおやけ)を役(えき)して　私(わたくし)に殉(したが)う者(もの)を小人(しょうじん)と為(な)す	人間は精神（心）と肉体の二つを備えている。そして、心は肉体よりも神（神性）に近いが、肉体は動物に近い（自己本位）。ここでは、精神を公とよんで主人とし、肉体を私とよび従者とする。すなわち、人間は公私両面を備えている。なお、精神を尊重するのは、良心を備えているからである。主人たる心のために従者たる肉体を使役するのは当然のことで大人（君子）の為すところ。これに反し、従者たる肉体のために、主人たる精神を使役するのは、小人（徳のない人）の為すところ、同じことする者は小人。公共のために尽くそう。

【２学期】

学年	松陰先生のことば	意味
1年	何事も　ならぬといふは　なきものを ならぬといふは　なさぬなりけり	「できない」のは「やらない」だけである。何事も、まず「これをやる」と決めて未来への展望を描き、できる・できないを考えるよりも、とにかくはじめの１歩を踏み出してみよう。
2年	一己の労を軽んずるにあらざるよりは いずくんぞ　兆民の安きをいたすをえん	自分一己のことも骨身を惜しまず働くようでなければ、どうして多くの人のために尽くすような立派な人間になれようか。一生懸命働こう。
3年	一月にして能くせずんば即ち両月にして之れを為さん　両月にして能くせずんば、 即ち百日にして之れを為さん 之れを為して成らずんば輟めざるなり	いったん「やる」と決めたことは、できるまでやめてはいけない。１か月でできなければ２か月、２か月でできなければ１００日、決して途中であきらめることなく、できるまで続けよう。
4年	人の精神は目にあり 故に人を観るは目においてす 胸中の正不正は眸子の瞭　眊にあり	人物の善し悪しを判断するには、その眼を見つめて、そのひとみに注意するより、ましなことはない。人の心に悪いことがあれば、ひとみは隠すことができない。心中正しければ、自然ひとみもはっきりしている。人の目を見て話したり聞いたりしよう。
5年	道は即ち高し　美し　約なり　近なり 人　徒に　其の高く 且つ美しきを見てもって　及ぶべからずと為し 而も其の約にして且つ近く　甚だ親しむ べきを知らざるなり	人の道は高大で又美しく、同時に簡約であり、手近いものである。しかし、人はその高大で美しいのを見て、とても自分にはできないことだと、初めから決めてかかるが、（それはまちがいであって）道徳というものは簡単なもの、手近い物であり、また、もっとも親しむべきものであるということを知らない。日常生活において、道徳を実行しよう。
6年	冊子を披繙すれば　嘉言林の如く躍々として 人に迫る　顧うに人読まず　即し読むとも行 わず　苟に読みて之れを行わば則ち千万世 と雖も得て尽くすべからず	本には、よいことがたくさん書いてある。よいことを知るだけで終わるのではなく、知ったことは実行しよう。

【３学期】

学年	松陰先生のことば	意味
1年	人々貴き物の己れに存在するを認めんこと を要す	人はそれぞれ自分の中に大切なものをもっている。生まれつき備わっているたいせつなものを見出し、尊いものと認めて生きていくことが大切である。
2年	朋友相交わるは　善導をもって　忠　告する こと　固よりなり	友達と交わるには、真心をもって、善に導くようにすすめることは、言うまでもないことである。
3年	人　賢愚ありと雖も　各々　一二の才能な きはなし　湊合して大成する時は　必ず全 備する所　あらん	人にはそれぞれ能力に違いはあるけれど、誰でも一つや二つの長所をもっているものである。その長所を伸ばすことができれば、必ず立派な人になれるであろう。
4年	善の善に至らざるは、熟の一字を闕く故なり。 熟とは口にて読み、読みて熟せざれば心に て思ひ、思ひて熟せざれば行ふ。行うて又 思ひ、思ひて又読む。誠に然らば善の善たる こと　疑なし。	素晴らしい書物でも、ただ読むだけでは実際の行動には結びつかない。生きた知識として身につかないからだ。「熟す」ことが大切で、そのためには声に出して読み、意味を深く考え、行動してみることだ。そこからまた考えて、さらに読む。こうして「読む・考える・行動する」を繰り返すことで、学んだことが熟していく。学んだことが一つの「技」となり、日常的に使えるようにしよう。
5年	余平素　行篤敬ならず、言忠　信ならずと云へ ども、天性甚だ柔懦迂拙なるを以て、平生多 く人と忤はず、又人の悪を察すること能はず、 唯だ人の善のみを見る。	私は日ごろから人のよい面だけをみて、むやみに衝突しないよう心がけている。自分は立派な人間ではなく、臆病で愚かな性格なため、人の悪いところを見つけて意見するなど、性に合わないからだ。争ったり、逆らったりせず、みんなと協力して進んでいくのが一番よい。
6年	其の心を尽すとは、心一杯の事を行ひ尽す ことなり。今人未だ嘗て心を尽さず。故に其 の一杯の所を知ること能はず。一事より二事、 三事より百事千事と、事々類を推して是れを行 ひ、一日より二日、三日より百日千日と、 日々功を加へて是れを積まば、豈に遂に心を尽 すに至らざらんや。宜しく先づ一事より一日よ り始むべし。	精いっぱい心を尽さなければ、自分の心にどれだけ力があるかがわからない。何か志を立てたら「思い立ったが吉日」で、その日にまず目の前の一つの事から始めてみなさい。次に二つ、三つと続けていくと、それが力になり、技になる。心を尽くすことの積み重ねが、自分の限界を広げるのである。